平成 26 年 11 月 7 日

ところ会員

ところ会　12 月行事案内

平成 26 年度、第 12 回テーマ：本郷・東京大学（文京区）界隈を歩く（文京ふるさと歴史館・ガイドと歩く「本郷文人コース」・東大他）

平成 26 年最後の行事を案内いたします。なお、終了後は秋津駅前の「さくら水産」にて希望者で簡単な納会を行いたいと思います。費用は実費精算とします。なお、東大の門を出たところに弥生美術館・竹久夢二美術館があります、ご希望の方はそちらに回って下さい。

記

■日　　時：平成 26 年 12 月 12 日（金）8 時 50 分集合

■集合場所：西武線所沢駅中央階段下（特急券売り場前付近）

■見学場所及び時間

所沢駅(8:50 集合・出発 8:55)⇒池袋(9:20)⇒地下鉄丸の内線・池袋駅
⇒本郷 3 丁目駅下車(9:37)⇒麟祥院⇒かねやす⇒本郷弓町のくすのき
⇒喜之床⇒文京ふるさと歴史館(10:30～11:00)⇒坪内逍遥旧居跡⇒炭団坂
⇒樋口一葉旧居跡⇒金田一京助・春一旧居跡⇒宮沢賢治 旧居跡⇒菊坂
⇒旧伊勢谷質店⇒新坂⇒蓋平館別荘⇒求道会館⇒徳田秋聲旧宅⇒赤心館
⇒菊富士ホテル跡地⇒落第横丁⇒桜木の宿跡⇒東大赤門(12:45)
⇒三四郎池⇒東大食堂(13:00～14:00)⇒東大弥生門
⇒解散（希望者：弥生美術館・竹久夢二美術館）⇒弥生式土器ゆかりの地碑
⇒地下鉄・千代田線根津駅⇒西日暮里⇒池袋駅(14:40 頃を予定)
⇒秋津駅(納会・有志のみ)⇒所沢駅帰着

■昼食場所：東大中央食堂

≪見学場所簡単ガイド≫

＜麟祥院（りんしょういん）からたち寺＞

臨済宗　妙心寺派　天沢山　麟祥院

開基「春日局」は徳川三代将軍家光の乳母として知られている。

功なり名をとげた春日局は、幕府の恩恵に報いるために、本郷湯島に寺院を建立しようと思い立った。これを知った将軍家光は、願いをかなえさせるために本郷湯島の土地を寺地として贈った。願いがかなえられた春日局は、「報恩山天沢寺」と名づけた。寛永七年（1630）渭川という高僧を新しく住職として迎え、改めて**春日局自身の菩提寺**とした。寛永 11 年（1634）渭川和尚から法号をおくられた。これを喜んだ家光は、法号をもって寺号とするように命じたため、「天沢山麟祥院」と号するようになった。

麟祥院には春日局の墓があり、**丸い穴があいたユニークな墓石**です。

＜かねやす＞

「本郷もかねやすまでは江戸のうち」という川柳があります。その「かねやす」は、享保の頃（1716～36）兼康祐悦（口中医師＝歯科医）が開いた店で乳香散という歯磨き粉を売っていました。これがヒット商品となり、いつも祭りのように客が集まったといわれます。

「かねやす」の看板は堀部安兵衛の書いたものです。堀部安兵衛は近くに住んでおり能書家で「かねやすゆうげん」と書いた看板を見に人が集まったといいます。

注：かねやすの前の通り「本郷通」は旧中山道です。

＜ 喜之床（きのとこ）＞

文京には、詩人**・石川啄木ゆかりの地**が多くあります。本郷周辺だけでも、3 回目の上京後、同郷の金田一京助を頼って下宿した**赤心館跡**、赤心館の宿賃を滞納したため移り住んだ**蓋平館別荘跡**、啄木一家が 2 階に間借りした**理髪店「喜之床」跡**などがあります。喜之床家屋は現在、愛知県犬山市の博物館明治村に移築、展示されています。また啄木終焉の地も、小石川久堅町（現文京区小石川 5-11-7）で、東京都旧跡に指定されています。

＜ 本郷弓町のクスノキ ＞

本郷弓町（ゆみまち）のクスノキは、**推定樹齢：600 年**といわれるクスノキの巨木です。クスノキは本州西部、四国、九州では幹周が 10m を越える

巨木となるものも珍しくなく、関東では伊豆に巨木が多い。弓町のクスノキは東京の都会の真ん中に残る有数のクスノキの巨木で、樹高：20m、幹周：8.4m であり、樹勢は旺盛であり文京区の保護樹木になっています。

この木の名称となっている「本郷弓町」は、かつての旧町名である。この付近は江戸城から見て鬼門にあたり、**御弓組与力同心**が屋敷を置いていたため**「御弓町」**と呼ばれていた。

江戸末期に作られた本郷界隈の切絵図では、この付近は「甲斐庄喜右衛門」という旗本の屋敷であった。甲斐庄氏は**楠木正成の後裔**といい、戦国時代末期に、徳川家康に仕えることになり戦功により先祖の地である河内国に領地をもらって 2000 石を知行された。甲斐庄氏は正房以後代々「喜右衛門」を名乗り、寛政の頃には知行 4000 石までに至っている。

＜ 文京ふるさと歴史館 ＞　　65 歳以上は入館料無料　10:00～

文京区は弥生土器命名の地として知られる通り、古くから豊かな歴史をもっています。江戸時代には武家と町人が暮らし、独特の産業や文化を形づくってきました。明治時代には東京大学をはじめとする多くの学校がつくられ、さらに森鴎外や樋口一葉など著名な文人たちが活動の拠点とし、文教のまちの礎を築きました。

文京ふるさと歴史館では、文京区の歴史や文化財をあらゆる世代の方に伝え、触れてもらい、郷土に対する愛着や関心を深めるお手伝いをいたします。

＜ 坪内逍遥旧居跡 ＞

この炭団坂上に、**坪内逍遥**が明治 17 年（1884）から 20 年（1887）まで住み、『小説神髄』『当世書生気質』を発表しました。少し大げさに言えば、炭団坂はまさに近代文学発祥の坂道ということになります。逍遥転居後、そこは旧松山藩主久松家運営の寄宿舎「常盤会」となり、正岡子規・河東碧梧桐・高浜虚子など、後に日本の俳壇を担う人々が青春時代を過ごします。その様子を描いた作品に司馬遼太郎『坂の上の雲』があります。

＜ 炭団坂（たどんざか） ＞　～近代文学発祥の坂道～

本郷台地から菊坂の谷へと下る急な坂である。名前の由来は「ここは炭団などを商売にする者が多かった」とか「切り立った急な坂で転び落ちた者がいた」ということからつけられたといわれている。台地の北側の斜面を下る坂のためにじめじめしていた。今のように階段や手すりがないことは、特に雨上がりには炭団のように転び落ち泥だらけになってしまったことであろう。

＜ 樋口一葉　旧居跡 ＞

樋口一葉（1872～1896）は小説家・歌人として明治期に活躍した。24 年間の短い生涯のうち、約 10 年間現在の文京区内に住んだ。

この地には、父の死後移り、母と妹を養いながらこの地の貸家で小説家として立つ決意をし、半井桃水の指導を受けながら、『闇桜』『たま襷』『別れ霜』『五月雨』などの小説を執筆した。『大つごもり』『たけくらべ』『にごりえ』『十三夜』など今も読み継がれる作品や多くの和歌を残している。

当時の雰囲気を漂わせる「**一葉ゆかりの井戸**」が残る。

＜ 金田一京助・春一 旧居跡 ＞

金田一京助(1882-1971)が住んでいた家が、鐙(あぶみ)坂の途中にあります。言語学者として第一線で活躍するかたわら、盛岡中学の後輩である石川啄木の援助などを行なっていました。アイヌ語の研究でも有名でした。長男の金田一春彦(1913-2004)も言語学者として有名で、この地に一緒に住んでいた時期もありました。その次男が最近 TV でお馴染みの金田一秀穂です。

＜ 宮沢賢治　旧居跡 ＞

宮沢賢治（1896～1933）は詩人・童話作家、花巻市生まれ。大正 10 年(1921)1 月上京、同年 8 月まで本郷菊坂町 75 番地稲垣方二階六畳に間借りしていた。菜食主義者で馬鈴薯と水の食事が多かった。

東京大学赤門前の文信社（現大学堂メガネ店）で謄写版刷りの筆耕や校正などで自活し、昼休みには街頭で日蓮宗の布教活動をした。これらの活動と平行して童話・詩歌の創作に専念し、１日 300 枚の割合で原稿を書いたといわれている。童話集『注文の多い料理店』に収められた「かしわばやしの夜」、「どんぐりと山猫」などの主な作品はここで書かれたものである。

８月、妹トシの肺炎の悪化の知らせで急ぎ花巻に帰ることになったが、トランクにはいっぱいになるほど原稿が入っていたという。

＜ 菊坂 ＞　～樋口一葉ゆかりの坂道～

本郷通りにある小さな坂、見送り坂・見返り坂が落ち合う地点から菊坂下交差点まで続く、長くゆるやかな坂道が、現在、菊坂と呼ばれています。江戸の地誌を見ると、「本郷丸山本妙寺の前なる坂をいふ也」（江戸鹿子）、「菊坂はもと菊坂町より東に向ひ、台町に上る急坂の名なりし」（新撰東京名所図会）などとあり、本妙寺坂・胸突坂、そのほか梨木（なしのき）坂など、菊坂周辺の坂道も、かつては菊坂と呼ばれていた時期があったようです。

この道は、明治 22 年に出来た道で、明治 16 年頃の参謀本部陸軍部測量局地図ではまだ道が有りません。それもその筈、加賀藩邸より流れ出た「東大下水」が流れていたからです。この川は遥か昔は船の通れる位の川で大田領との境ともいわれていた場所でした。

菊坂には、くらしに困った樋口一葉がたびたび通った**旧伊勢屋質店の土蔵**も現存します。菊坂中腹からやや北には、かつて宇野浩二・竹久夢二・谷崎潤一郎・広津和郎･･･多くの文人たちが止宿した**菊富士ホテル跡地**があります。

＜ 旧伊勢谷質店 ＞　国登録文化財

樋口一葉（1872～1896）が菊坂の家に住んでいたときから、生活が苦しくなるたびに通った質屋。下谷区竜泉町に移ってからも通った。一葉が亡くなったときの香典帳に、伊勢屋から香典が届けられたことが記されている。伊勢屋は 1860 年の創立であった。

樋口一葉は本郷界隈に約 10 年間暮らしましたが、晩年は生活が貧窮し、明治 29 年に 24 歳で亡くなる間際まで伊勢屋質店に通ったことが日記に記されています。伊勢屋質店は昭和 57 年に廃業しましたが、今でも蔵や見世などの建物が大切に保存されています。毎年、一葉忌の 11 月 23 日のみ、一般公開しています。

＜ 新坂 ＞

名前は新坂だが、江戸時代にひらかれた古い坂です。このあたりは、もと森川町と呼ばれ、金田一京助の世話で、石川啄木が、一時移り住んだ**蓋平館別荘**（現太栄館）をはじめ、高等下宿が多く、二葉亭四迷、尾崎紅葉、徳田秋声など、文人が多く住んだ。この坂は、文人の逍遥の道でもあったと思われる。

＜ 蓋平館（がいへいかん）別荘 ＞

新坂の坂上、**蓋平館別荘**には、かつて石川啄木が下宿しました。宿賃の滞納で、近くの**赤心館**から移ってきたものです。現在は、太栄館という旅館になっており、玄関前に「東海の小島の磯の白砂にわれ泣き濡れて蟹とたわむる」と記された歌碑（昭和 27 年建立）があります。

＜ 求道会館 ＞

求道会館は**キリスト教会風の仏教寺院**で、日本に初めてゼツェション（絵画・建築・工芸の革新運動。過去の芸術様式から分離して，生活や機能と結びついた新しい造形芸術の創造をめざした）を本格的に紹介したといわれる建築家・武田五一の設計。武田の代表作・山口県庁舎とほぼ同じ大正 4 年(1915)頃の作品です。平成 8 年より平成 14 年 6 月にわたって修理工事が行なわれた。求道会は明治の宗教改革者・近角常観(ちかずみじょうかん)の創立した団体。

近角常観は**浄土真宗の僧侶**で、ヨーロッパ、アメリカで 2 年間、宗教事情の視察をし、キリスト教のさまざまな布教活動を見て刺激を受けた。仏教ももっと社会とつながりを持つようにと、本郷に学生寮を作り、そこでキリスト教の**日曜礼拝を真似て日曜講話を始めた**とのことです。

＜ 徳田秋聲旧宅 ＞　……東京都指定旧跡

徳田秋聲は『新世帯』『足跡』『あらくれ』『仮装人物』『縮図』･･･ほか膨大な数にのぼる作品を発表し、明治・大正・昭和を通じて活躍した文学者です。秋聲は、人生の大半を文京で過ごし、文京を舞台にした作品を多く生み出しています。その秋聲が終焉を迎えた自宅が本郷 6 丁目に現存しています。

＜ 赤心館 ＞

石川啄木三回目の上京で、北海道での放浪生活から創作活動に専念するため、盛岡中学の先輩金田一京助をたよって、明治 41 年に赤心館に下宿した。

＜ 菊富士ホテル跡地 ＞

宇野浩二・宇野千代・尾崎士郎・直木三十五・広津和郎・竹久夢二・谷崎潤一郎・宮本百合子・坂口安吾・大杉栄・伊藤野枝…、菊富士ホテルに止宿した錚々たる顔ぶれです。菊富士ホテルは、明治 29 年より下宿・菊富士楼を経営していた岐阜県大垣出身の羽根田幸之助・菊江夫妻が、大正 3 年、菊富士楼隣地に開業したものです。同年開催の東京博覧会に訪れる客をあてこ

んでの経営でしたが、次第に**文人たちの集まる宿**となり、さまざまなドラマが繰り広げられる舞台となりました。建物は戦災を受け焼失、跡地には昭和52年、羽根田家により止宿者の名を刻む石碑が建立されました。

＜ 樋口一葉 桜木の宿跡 ＞

一葉は、その幼少期の4歳から9歳までの5年間東京大学赤門近く、法真寺の隣家で過ごしています。のちに一葉は、その家を「桜木の宿」と名付け、座敷や庭の様子などを雑記のなかに書きとどめ、当時のくらしを懐かしんでいます。木造倉庫がついていた45坪もあった家でした。この時は、姉のふじも最初の嫁ぎ先から戻ってきており、両親、二人の兄、そして妹と、家族全員がそろっていて、父親の則義の事業も順調で、経済的にも家庭的にも最も恵まれていた時代だったのです。

作品「ゆく雲」には、「寺内広々と桃桜いろいろ植わたしたれば･･･」など法真寺や「桜木の宿」と思われる情景が描写されています。法真寺では毎年、一葉の命日である11月23日に、一葉忌を開催しています。

法真寺には一葉の作品「ゆく雲」に登場する「腰ごろもの観音さま」も現存している。「腰衣の観音さま、濡れ仏にておはします御肩のあたり、膝のあたり、はらはらと花散りこぼれて、前に供へし樒の枝につもれるもをかしく」と、当時の情景を「ゆく雲」の中で書いています。

＜ 東京大学赤門 ＞　　国指定重要文化財

加賀藩13代藩主前田斉泰（なりやす）は、文政10年（1827）に11代将軍徳川家斉（いえなり）の娘溶姫（やすひめ・ようひめ）を正室に迎えた。この門は、その際に建立された御守殿門。

当時、三位以上の大名が将軍家から妻を迎えた場合、その人・居所を御守殿と称し、その御殿の門を朱塗りにしたところから、表門の黒門に対して赤門と呼ばれた。赤門は焼失に際して再建を許されない慣習があり、この御守殿門は往時の原型を残す唯一の門である。

＜三四郎池＞

元和元年(1615)の大阪夏の陣の後、**加賀藩前田家**が幕府から現在の敷地を賜った。寛永3年(1626)前田家3代利常の時に、徳川**3代将軍家光訪問の内命を受け、殿舎、庭園の造園にかかり完成まで3年を要した**。外様大名として誠意を示す必要があった為である。このとき完成した庭園が**育徳園**と呼ばれ、池を「**心字池**」といった。夏目漱石の名作は『三四郎』は、**ここ**を舞台としたため、誰言うとなく「三四郎池」と呼ばれるようになった。

＜ 東京大学中央食堂 ＞

席数：420席
営業時間：平日　　11:00～21:00（一般利用は13:00～　）
場所：大講堂前広場下

＜「弥生式土器ゆかりの地」碑 ＞　……弥生時代の名はここから

明治17年（1884）、東京大学の坪井正五郎、白井光太郎と有坂鉛蔵の3人は、根津の谷に面した貝塚から赤焼きのつぼを発見した。

これが後に縄文式土器と異なるものと認められ、発見地の地名を取り「弥生式土器」と名付けられた。しかし、「弥生式土器」の発見地は、都市化が進むなかではっきりしなくなり、推定地として3か所が指摘されていた。

昭和49年（1974）、東京大学構内の旧浅野地区の発掘調査により、二条の溝と貝層、弥生式土器等が検出された。**都心部における弥生時代の数少ない貝塚を伴う遺跡**として重要であることが評価され、昭和51年（1976）に「弥生二丁目遺跡」として国の史跡に指定された。
しかし、**弥生式土器の発見地は特定するにいたっておらず**、現在も調査研究が進められている。

＜ 弥生美術館・竹久夢二美術館 ＞　入館料900円（両館合わせて）

東京大学 弥生門を出てすぐ右にあります。希望者のみ行って下さい。

弥生美術館の3階展示室は**高畠華宵**の常設展示室で、3ヶ月ごとにテーマを変えながら、常時50点の華宵作品を公開しています。1・2階の展示室は企画展を、現在はプラモデル・ボックスアートの第一人者であり、「戦車画」の最高峰として国内外に高く評価されている絵師・**髙荷義之**の作品を展示しています。

竹久夢二美術館　～生誕130年記念 再発見！竹久夢二の世界
【後期】ボヘミアン・夢二　大正ロマンの画家、知られざる素顔～

都内で夢二作品を鑑賞できる唯一の美術館において、古き良き時代を思わせる〈夢二式美人画〉から、モダンな表現を試みたデザイン作品まで、幅広く大正ロマンの世界をお楽しみいただけます。

以上